

2017 年度 中野香織ゼミ卒業論文

兄弟間や男女間で見ると対人不安と親和動機の相関関係

駒澤大学 経営学部経営学科 4 年
西園諒

【目次】

はじめに（問題意識、研究目的）

1. 対人恐怖と対人不安

1-1. 対人恐怖とは

1-2. 対人不安とは

1-2-1. 対人不安の発生過程

1-2-2. 対人不安特性を持つ人の特徴

2. 親和動機

2-1. 拒否不安

2-2. 親和傾向

3. 兄弟、姉妹の性格に関する先行研究

3-1. 出征順位と性格の相関関係

3-2. 兄弟間の組み合わせと性格の相関関係

4. 女子学生の従属意識に関する先行研究

4-1. 女子学生の従属意識

4-2. 女子学生の親和動機

5. 仮説と検証

5-1. 仮説の導出と仮説

5-2. 調査概要

5-2-1. 被験者

5-2-2. 調査時期

5-2-3. 調査項目

5-3. 検証結果

6. まとめ

6-1. 本研究のまとめ

6-2. インプリケーション

6-3. 本研究の限界

参考文献

はじめに（問題意識、研究目的）

日本人は元来他人に迎合する傾向があるということが言われて久しい。2016年9月22日にABC朝日放送のテレビ番組「キャスト」にて発表されたデータによると、約7割の日本人が「自分是人見知り」と自覚している。特に著者の周りの大学生には「人見知り」が多く存在している。彼らは自分が人見知りだということを自覚しており、新しいコミュニティに一步踏み出すことができているように感じている。吉井（2017）によると、初対面の人とうまく話せないと感じている大学生が多いという研究がなされている。

しかし、著者は「人見知り」ではないと自覚している。実際今まで知らなかった人と仲良くなることに快感を覚えるし、新たな知識を芽生えさせてくれる場がとても好きである。ある飲み会の場で隣になった男性に話しかけたところ、彼は人見知りだったらしくうまく会話を盛り上げることができなかった。この経験はかなり衝撃的な経験で、この後彼に人見知りがなくなるまで仲良くなり普通に話すことができるようになるのではあるが、人見知りの人に対して上手にアプローチをする方法について長い間頭を抱えてきた。著者と人見知りのある大学生の間にはどのような違いがあり、そういった友人に対してどういったアプローチをすればコミュニケーションをうまくできる状況に持って行くことができるのか体系的にまとめていきたいという思いから本研究に取り組んで行くことにした。

筆者が実感として「人見知り」だと感じるところで大きく異なると考えているのは男女間と兄弟間である。

一つ目の男女間について「人見知り」だと感じる人の差が大きいと感じた理由の一つに女性の形成するグループの存在がある。女性は男性に比べてグループを形成する傾向がよく見て取れる。著者の実感としては女性は小学生の頃からグループを形成し、クラス替えなどがあつた時は男性より女性の方が表面的ではあるかもしれないものの、親しくなるスピードは早かったと感じている。佐藤（1995）によると、女子生徒が友人たちのグループに所属せず一人でいることは滅多にないと述べている。このことから男性よりも女性の方が人見知りと感じる人が少なく、新たなコミュニティや初対面の人に対してもコミュニケーションを難なく行っているのではないかと考えていた。しかし、著者が独自に男性4人、女性4人に行ったアンケートでは男性2人が人見知りだと自覚しているのに対して女性4人が人見知りだと自覚していることがわかった。このことから、男女間で「人見知り」に対する考え方が異なっているかもしれないという仮説を元に研究を行って行くことに決めた。

また、兄弟間でも「人見知り」の差があるように感じられる著者には大学3年生の弟がいるのだが、弟は強く自分が「人見知り」だと感じていることがわかった。また、平林（1998）によると、兄を持つ妹の性格は物事に積極的であり、姉を持つ妹の性格は遠慮がちであると述べている。このことから兄弟間、並びにその出生順位でも「人見知り」の度合いが変わるのではないかと考えた。

本研究では男女間や兄弟間での人見知りの相関を明らかにした上で、人見知りだと自覚していない人から人見知りだと自覚している人に対するコミュニケーションの体系化を図っていきたい。

1章 対人恐怖と対人不安

本章と次章では「人見知り」の学術的な言及をしていきたい。人見知りには「対人恐怖」「対人不安」「親和動機」のキーワードが挙げられるが、本章では「対人恐怖」と「対人不安」について見ていきたい。

1-1 対人恐怖とは

対人恐怖という用語は、森田（1932）の論文の中で「みずから人前を気にすることをもって恐怖するもので、羞恥恐怖と名づけたほうが適切である。赤面を見られることを苦にするのはその一種であって、人前で顔の形や態度をとり乱すのを苦にするものや、人と対応するとき、脇の下から汗が出て、言葉が吃ったりするのを恐れたりするものがある」と述べられたのが初めである。その後、1953年の森田の論文中で「恥ずかしがることをもって、自ら臍甲斐無いことと考へ、恥ずかしがらないようにと苦心する負け惜しみの意地っ張り根性である。自ら人前で、恥ずかしがることを苦悩する病であって、いわば羞恥恐怖というべきものである。すなわち周囲に対する対人関係で種々の苦悩を起こすものが多いから、これを対人恐怖と名づけ、赤面恐怖は対人恐怖の一種であるというべきものである。」と定義された。その後、小川（1974）は対人恐怖について「極めて意識性に富み、自己内省的で、対人場面における自己の一挙手一投足を極端なまでに意識し、それにこだわり、そこから由来する不安について悩む」と述べ、近年では鍋田（2009）が「他者に受け入れられ、他者に認められたいと強く思うがゆえに、かえって他者から受け入れられない・評価を得られないことを強く恐れ、その結果、他者との触れ合いそのものを恐れる、という心性に由来する」と述べている。これらの定義は対人場面での緊張、対人交流への戸惑い、赤面恐怖、視線恐怖、醜貌恐怖、自己臭恐怖など様々な症状を含む幅広い概念となっており、笠原ら（1972）は対人恐怖を症状ごとに①青年期において一時的にみられるもの、②恐怖症段階でとどまるもの、③関係妄想性をはじめから帯びているもの、④前統合失調症症状として、ないしは回復期における症状としてみられるものの4群に分類している。また、鍋田（1997）は対人恐怖の病態を①思春期の一過性に見いだされるもの、②反応性のもの、③神経症のもの、④重症対人恐怖症、⑤対人恐怖症状を伴いやすい他の病態、の5段階に分類している。

対人恐怖症とは神経症の一種でもあるが、病理水準に及ばないまでも、これに類似した対人恐怖的な心性は、特に青年期にも見出されることが明らかになっている（笠原・稲浪、1968；阿部・増井、1981）。例えば、小川（1974）は日本人の他者を意識する程度と自らを否定的に捉える傾向は、対人恐怖症患者にみられる症状と共通的な部分が多いという点で、日本人の心性を±対人恐怖的心性²として呼んだ。また日本の深刻な社会的問題であるひきこもりは対人不安と密接な関連をもつと考えられる。しかしながら、同じ東アジア文化圏に属する日本と韓国は、公的自己意識と対人不安の関係で異なる様相をみせている。日本人と韓国人の対人不安と公的自己意識、自尊感情を比較した研究では（Cho, Inumiya, Han, & Kimura, 2005）、日本人は韓国人よりも公的自己意識が低いにもかかわらず、対人不安水準が高いことが指摘されている。日本人の特性として対人不安特性が高いことを言うことができる。

堀井（1993）の研究では大学生の対人恐怖心性の各特徴の平均値と、2008年の調査において推定された大学生の対人恐怖心性の各特徴の平均値を比較した。その結果、対人恐怖心性の特徴である「集団に溶け込めない悩み」、「目が気になる悩み」、「生きていることに疲れている悩み」に関する平均値については、1993年の調査時よりも2008年の調査時のほうがそれぞれ男女共に有意に高くなった。この結果から、大学生の対人恐怖心性は時代的推移と共に高まっている可能性が考えられる。「自分や他人が気になる悩み」については、男女共に時代的推移の変化に従って高まっている傾向があると考えられる。

1-2 対人不安とは

初対面の人と話をするとき、人前でスピーチをするとき、あるいは目上の人と話をするときなどに、人は不安を感じることもある。このように対人関係に由来する不安は対人不安と呼ばれている。菅原（1992）によると、対人不安とは一般的に対人場面で個人が体験する不安感の総称と捉えられ、Shlenker & Leary（1982）によって「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義される。対人不安で扱われる不安とは、あがり、困惑、シャイネスなどの現象を指し、この傾向が重度になり生活に支障をきたすようになると DSM-IV（人格障害のこと）の社会不安障害と同様の病態になるとされる（Leary, 1983 正和秀敏監訳 1990）。

1-2-1. 対人不安の発生過程

対人恐怖の発症メカニズムについて、近藤（1964）は、日本人の特徴的考え方として、お互いに相手を気遣い、配慮する心が要請されている「配慮的要請」とし、一方、欧米人の特徴的考え方として、個人としての自己主張が要請される「自己主張的要請」と名付けた。日本社会の中ではこの2つの要請において葛藤が生じやすいことから、この葛藤を対人恐怖の発症原因としている。また、河合（1975）は、対人恐怖の問題意識を倫理感の問題としてとらえ、欧米における個の倫理に対して、日本においては場の倫理が重視されており、双方の倫理感の葛藤が対人恐怖の問題意識に結びついているととらえている。さらに、近藤（1980）は、時代的変遷の観点から対人恐怖を考察し、時代的変遷が見られる対人恐怖症の症状の中でも、圧迫感・不安・緊張についてはいかなる年代においても共通して認められていると論じている。

1-2-2. 対人不安特性を持つ人の特徴

対人不安特性が高い人は、対人関係において様々な問題を持つことが明らかになっている。La greca & Lopez（1998）によると、健常な青年を対象に、自身が受けているソーシャルサポートや社会的受容の程度についての回答を求め、対人不安特性が高い青年は男女共、クラスメイトからのサポートや自身に対する社会的受容が低いと自己評価している。Greco & Morris（2005）は、健常な小学生を対象に、自身の友人関係の質について、否定的な側面と肯定的な側面から尋ねた。両側面と対人不安特性との関係を検討したところ、対人不安特性の高い人は、男女共、自身の友人関係を否定的であると評価し、対

人不安特性が高い女子は友人関係が肯定的ではないと評価した。このように対人不安特性が高い人は自己評価による対人関係が良好ではないと述べている。

西村（2005）は、実験協力者と被験者との会話をする実験を、対面条件とコンピュータを会したコミュニケーション条件で行なった。どちらの条件においても、対人不安特性が高い人は低い人と比べ、会話の相手が自分との関係性を悪く評価していると感じていた。また、金子・本庄・高村（2003）は、高校生を対象に質問紙調査を行い、他者の行動から過度に「嫌われている」、「避けられている」といった確信をもつ被害妄想的観念の強さと、対人不安特性との関係性を検討した。結果、対人不安特性の高い人は、対人場面において、否定的な解釈をしがちであることが明らかになった。

Clark & Wells（1995）は、以上のような対人不安特性が高い人の否定的な解釈バイアスが、対人関係に悪影響を与えていることを指摘している。例えば、実際には対人的な脅威がない対人場面にもかかわらず、他者からの嫌悪や拒否を受けていると解釈することにより、その相手に対して視線をそらすなどの不自然で否定的な行動を取り、その行動によって、その相手から否定的な評価を受けることが推測される。このように、対人不安特性高い人は、対人場面において否定的な解釈バイアスを持つことが明らかになっており、それによって良好な対人関係が阻害されていると指摘されている。

以上のように対人不安特性の高い人は対人関係において様々な問題を持つことがわかる。

2章 親和動機

本章では全勝冒頭で述べた通り、人見知りの学術的言及の双輪の一つである「親和動機」について述べていきたい。

親和とは、人が他の人と一緒になろう、あるいは他の人と一緒にいようとする傾向のことである。人が集まり、集団を形成するにはいくつかの理由を考えることができる。例えば、集団によって自分一人では達成できない目標を達成する。あるいは自分には不可能なことを他者に代行してもらおう等である。

しかし山本（2011）によると、人間には、目的を達成するための手段として集団や他者を求めるだけでなく、他者と一緒にいること自体が満足をもたらすが故に、それを求めようとする欲求があることが知られている。これが親和欲求である。Hill(1987)は、人が他者と親和する動機は単一の目的によるものではなく、いくつかの異なる目的から生まれるものであると指摘している。そして多様な先行研究の概観から、人が他者と親和する動機を「情緒的支持」「ポジティブな刺激」「注目」「社会的比較」という4つの社会的報酬に由来するものとして整理している。彼はこの枠組みに基づいて対人志向性尺度(interpersonal orientation scale)を作成し、因子分析などによってその構造を検討することで、他者と親和する動機がこの4つの下位側面から測定できることを示している。

これまでの親和動機の研究は親和動機に「拒否不安」と「親和傾向」の2つの性質があることを指摘してきた。以下、2つの性質について述べていく。

2-1 拒否不安

Sipley & Veroff (1952) によると拒否不安とは「分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し、他者からの拒否に対する恐れ of 要素を持つ性質のこと」をいう。石田ら (2009) は、仲間集団の特徴および仲間集団の形成・所属動機の関連について、仲間集団の形成・所属動機には、「グループに入っていないと教室に居づらい」、「ひとりぼちな人だと思われたくない」という消極的な動機づけが含まれていることを示した。これは言い換えると、親和動機の拒否不安に該当すると考えられる。杉浦 (2000) はこの拒否不安を相手から拒否されて一人ぼちになることを避けようとする不安として取り扱っている。また、大平 (1995) では、「拒否されたくない」という気持ちを強く持つと、本音を出すことを避け、希薄な人間関係になる事例が報告されている。

2-2 親和傾向

人は強度の不安や恐怖状況に陥ると孤独の回避や他者と仲良くしたいという傾向が見られる。渋谷 (1979) は、この傾向のことを親和傾向と定義している。たとえば Schachter (1959) の親和行動の実験では、不安な気持ちで 10 分間程実験準備のため待機している被験者に、この間の待ち方の希望を尋ねた。この結果、高不安状況は他者と一緒に待ちたいとする親和行動を助長していることがわかった。

3章 兄弟、姉妹の性格に関する先行研究

畑田 (1993) によると人は長子・中間子・末子・一人っ子の 4 パターンに分けることができる。それぞれの特徴として長子は兄弟の一番上、中間子は二番目以降に生まれた子供で上下に兄弟がいる、末子は兄弟の一番下、一人っ子は兄弟がいない、ということが挙げられる。本章では著者の抱いていた疑問の一つである兄弟間の性格の差について見ていきたい。

2-1 出生順位と性格の相関関係

子供の性格を規定する要因として、兄弟関係が上げられる。そして、兄弟関係が子供の性格形成に大きなかわりを持つとされてきた。

兄弟関係は子供と子供の関係であり、情緒的な結びつきの強い関係である。弟妹にとって兄姉が目標や同一視の対象になったり、兄姉が弟妹を指導したりすることもある。このことから、縦の関係であることが言える。そしてまた、兄弟喧嘩など、お互いを同じ次元において平等の立場で張り合っている。また、友達同士のようにふるまうこともあり、横の関係でもある。

依田 (1963) では性格特性に影響を与えると考えられる諸条件として、兄弟の性別構成、年齢差などについて調査し、その結果をまとめると以下のような表になる。

図1 兄弟の出征順位と性格の間の相関関係

	良い点	悪い点
長子（長男、長女）	仕事が丁寧、几帳面、聞き上手	めんどくさがり、困難な物事に消極的、
次子、中間子（次男、次女）	行動的、外交的、	依存的、強情、気性が激しい
一人っ子	一生懸命、物事に慎重	困難を避ける、口ごたえが多い

依田(1963)より著者作成

3-2 兄弟間の組み合わせと性格の相関関係

上記にもあるように、子供の性格を規定する要因として、兄弟関係が上げられる。そして、兄弟関係が子供の性格形成に大きなかかわりを持つとされてきた。

図2は平林(1998)を参考に作成したものである。今回は依田(1963)が行った調査をもとに、本人の性別を女性と限定し、出生順位から兄弟関係による性格的特性について調べた結果である。以上の事をまとめると今回の出生順位から見る性格特性は時代に関係なく、また年齢にも関係なく固定化され、不変なものだった。

過去に1963年、1980年、1998年と調査結果に大きな変化が見られないことから出生順位からみる性格特性についてはほぼ固定化されていると考えても良いと言える。

図2 兄弟の組み合わせと性格の間での相関関係

	良い点	悪い点
弟を持つ姉の性格	お調子者、ムードメーカー的な存在	遠慮がち、やや消極的
妹を持つ姉の性格	人まねが上手い、言いつけを守る、負けず嫌い	面倒嫌い、ずるがしこい
兄を持つ妹の性格	物事に積極的	嫉妬深い、わがまま、
姉を持つ妹の性格	遠慮がち	好き嫌いが多く、神経質、落ち着きがない

平林(1998)より筆者作成

4章 女子学生の従属意識に関する先行研究

本書では女子学生の従属意識について見ていきたい。グループを作りそこに所属している女子学生にはどのような意識が隠されているのかを先行研究を基に見ていきたい。

4-1. 女子学生の従属意識

天野(1975)によると、女子のグループは排他的であり、お互いに誰がどのグループであるというように一つの方を決めつけてしまいがちである。また、佐藤(1988)によると、「相互に独立し、排他的であるという特徴が顕著に見られるのは昼食の時間である。女子生徒たちはグループごとに机を寄せ合って食事をする。食事を一緒にできる相手がいることは非常に重要であり、そのためにグループが考えられる。グループに入れず、一人で食事をしなければならないのは、惨めなこととして捉えられる」と述べている。実感ベースではあるが、それは大学生の日常でも考えられることである。いわゆる「ボッチメシ(一人で昼食をとること)」を行なっているのをよく見かけるのは男子生徒である。

佐藤(1995)では、そういった女子生徒が何人組のグループを形成しているのか、また、女子生徒がグループに所属している理由について研究を行なっている。その研究によると、高校生の集団的人間関係は、2人ペアというよりも3人以上からなるグループという形式が中心であり、9割以上のものがグループに所属していることが明らかにされた。そして、そのグループは、単一グループである場合と、複数のグループからなる場合がある。しかし、さらに分析を進めると、実際に行動する場合などの小さな単位での結びつきでは、3~4人程度のグループが6割以上を閉めていることが明らかにされた。

また、高校生女子がグループに所属している理由は大きく2つにまとめられることが示された。一つは浮いた存在になりたくないからであり、もう一つは複数の友人によって支えられているコラである。これは、入っていないと色々不都合だという理由と、入っていると良いことがあるという理由とも言える。グループに所属することに対して、消極的と積極的の両面の理由が見出された。高校生女子は、グループを肯定的、積極的に受け入れてグループに所属しているわけではなく、グループに入っていないと高校生活に不便や不都合が生じるから、良い面・悪い面があっても、グループに入らざるを得ないでいることが明らかにされた。

佐藤(1995)によると、女子生徒が友人たちのグループに所属せず一人でいることは滅多にないと述べており、保坂(1993)によると、女子生徒たちは「自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている」と述べている。

4-2. 女子学生の親和動機

小出(1998)によると、「青年期後期にいる大学生においては友人を中心とした他者と親しく交流を持ちたいという親和動機があるが、その動機は女子学生において強い。他者との関係を円滑にすすめるためには、他者の一緒にいる場面では、世間で良く使われる「場の空気を読む」ことが重要になる。「場の空気を読む」ということは、その場にいる他者の感情を理解し、その相手の感情に応じて、自分の気持ち

や行動をコントロールすることである。そこには、「相手の感情を理解する能力」と、その感情に応じて「自分の感情をコントロールする能力」が必要なのである」と述べている。

5章 仮説の導出と仮説

5-1. 仮説導出と仮説

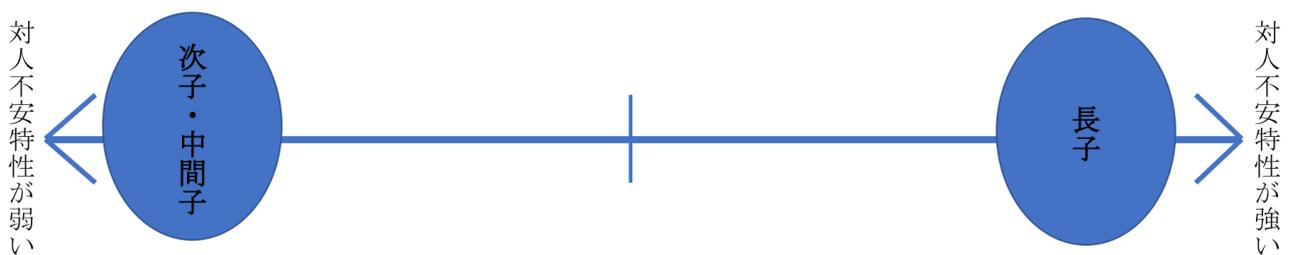
ここからは、仮説の導出と仮説を示していきたい。先に上記に挙げた先行研究についてまとめる。菅原 (1992) によると、対人不安とは一般的に対人場面で個人が体験する不安感の総称と捉えられ、Shlenker & Leary (1982) によって「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義される。また、山本 (2011) によると、人間には、目的を達成するための手段として集団や他者を求めるだけでなく、他者と一緒にいること自体が満足をもたらすが故に、それを求めようとする欲求があることが知られている。これを親和動機と定義づけている。

また、平林 (1998) や依田 (1963) による先行研究で出生順位と性格の相関関係や兄弟間の組み合わせと性格の相関関係があることが認められている。特に依田 (1963) によると、次子、中間子は行動的・外交的であり、長子は聞き上手であることを述べている。

以上を踏まえて仮説1の導出を行なった。

仮説1 次子、中間子よりも長子の方が対人不安特性が高い

図3 仮説1の組織図



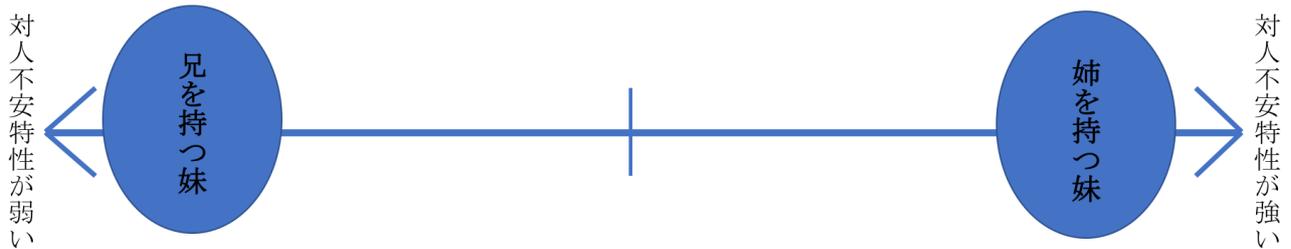
著者作成

また、平林（1998）によると、兄を持つ妹の性格として物事に積極的であること、姉を持つ妹の性格として遠慮がちであることが述べられている。

以上を踏まえて仮説 2 の導出を行なった。

仮説 2 兄を持つ妹よりも姉を持つ妹の方が対人不安特性が高い

図 4 仮説 2 の組織図



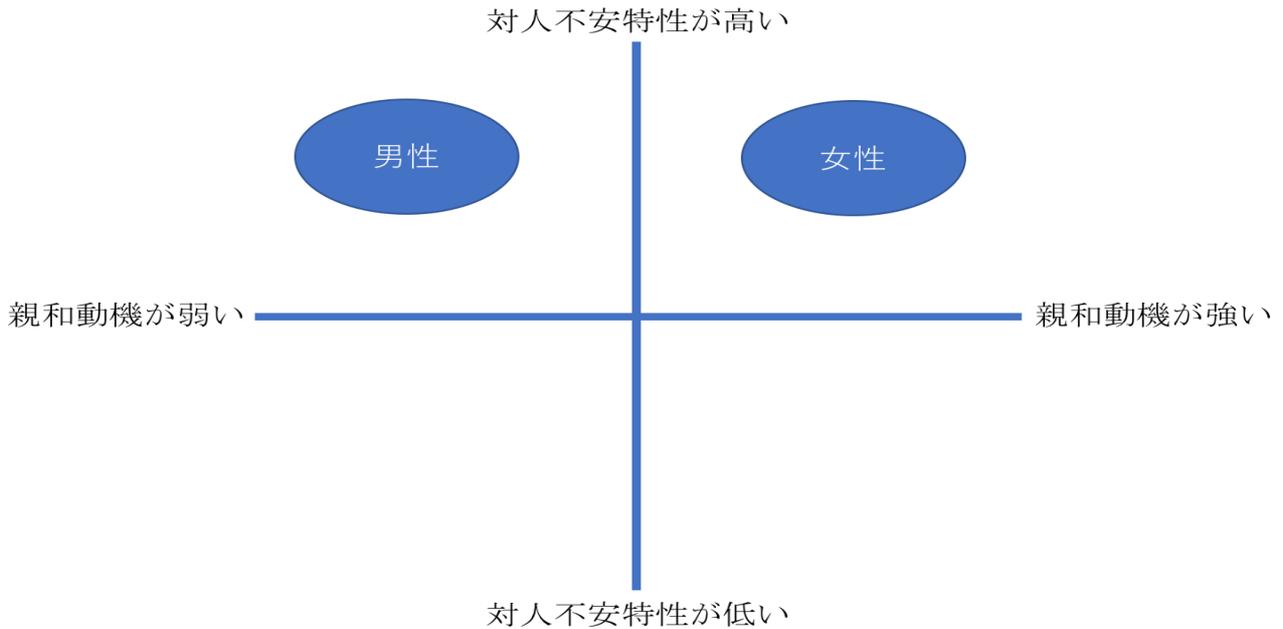
著者作成

また、佐藤（1995）によると、高校生女子がグループに所属している理由は大きく 2 つにまとめられることが示された。一つは浮いた存在になりたくないからであり、もう一つは複数の友人によって支えられているからである。これは、入っていないと色々不都合だという理由と、入っていると良いことがあるという理由とも言える。グループに所属することに対して、消極的と積極的の両面の理由が見出された。高校生女子は、グループを肯定的、積極的に受け入れてグループに所属しているわけではなく、グループに入っていないと高校生活に不便や不都合が生じるから、良い面・悪い面があっても、グループに入らざるを得ないでいることが明らかにされた。すなわち男性よりも女性の方がグループに所属したい欲が高いと推測することができる。

以上を踏まえて仮説 3 の導出を行なった。

仮説 3 対人不安を感じる男性よりも対人恐怖を感じる女性の方が親和動機が強い

図 5 仮説 3 の組織図



著者作成

5-2. 調査概要

5-2-1. 被験者

首都圏の大学生 100 名（男性 35 名、女性 65 名）を対象とする。仮説によって調査対象者は様々ではあるが、全大学生を調査対象者として調査を行う。

5-2-2. 調査時期

調査は 2017 年 12 月 13 日(水)～18 日(金)に行った。Google フォームでのアンケート調査を、QR コードに落とし込み、紙媒体で読みとってもらう方法で調査を行なった。

5-2-3. 調査項目

状況別対人不安尺度：毛利・丹野（2001）による状況別不安尺度の項目の全 5 因子 30 項目の中から 1 因子 8 項目を抜粋して調査を行なった。本研究ではいわゆる「人見知り」と、「人見知りではない人」を調査対象としており、そのほかの 4 因子については「発表・発言不安」「異性への不安」「会話のない不安」「目上への不安」という因子から構成されており、適当ではないと考えたため使用しなかった。

図6 状況別対人不安尺度の因子

項目	因子
1	あまり親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう
2	特別親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう
3	単なる知り合い(同性)で同年代の人と一緒にいる時の緊張感は、他の人より私の方が強いと思う
4	嫌いな人(同性)が話しかけてきた時、私は他の人たちより落ち着かない気がする
5	全く気の合わない人(同性)と雑談している時、私はとても緊張する
6	私はあまりよく知らない友人(同性)と雑談している時、私はとても緊張する
7	とても苦手な人と偶然出会った時の緊張感は、他の人より私の方が強いと思う
8	初めて会った人と雑談している時、私は他の人たちより落ち着かない気がする

毛利・丹野(2001)より著者作成

親和動機尺度: 杉浦(2000)による親和動機尺度の全2因子18項目をそのまま用いて調査を行なった。親和動機には親和傾向と拒否不安があると上で述べたが、杉浦(2000)での親和動機尺度では双方とも項目の中に含まれており、両因子とも計9項目で尺度を完成させており、親和動機尺度を測るのに適当であると考えたため全項目で調査をとるものとした。

図7 親和動機の尺度

尺度	項目	因子
拒否不安	1	仲間から浮いているように思われたくない
	2	どんな時でも相手の機嫌を損ねたくない
	3	できるだけ敵は作りたくない
	4	友達と対立しないように注意している
	5	誰からも嫌われたくない
	6	みんなと違うことはしたくない
	7	仲間外れにされたくない
	8	一人であることで変わった人と思われたくない
	9	一人ぼっちでいたくない
親和傾向	1	人とつきあうのが好きだ
	2	友人とは本音で話せる関係でいたい
	3	友人には自分の考えていることを伝えたい
	4	人と深く知り合いたい
	5	友達と悲しみや喜びを共有したい
	6	知り合いが増えるのが楽しい
	7	できるだけ多くの友人を作りたい
	8	友人と非常に親密になりたい
	9	一人であるよりも人と一緒にいたい

杉浦(2000) より著者作成

5-3. 検証結果

5-3-1. 仮説1

はじめに仮説1の「次子、中間子よりも長子の方が対人不安特性が高い」を検証する。仮説1では「長子」「次子・中間子」にグループ分けを行い、毛利・丹野(2001)による状況別対人不安尺度を元に作成した調査項目に関するt検定を行なった。その結果、「特別親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう」(長子=3.55 次子・中間子=3.19 $t(47.4)=1.192, p<0.239$)の項目に有意差を認めることができなかったものの、その他の7項目では有意差を認めることができた。加えて、状況別対人不安の合計尺度で見ると、優位確率は0.007となっており、有意差を認めることができた。

ひと項目ごとで見た時に仮説1は一部支持という結果ではあったものの、合計尺度で見た際に有意差

を認めることができた。したがって仮説 1 は支持された。

図 8 仮説 1 の t 検定

質問項目	平均値		t値	自由度	有意確率
	長子	次子 中間子			
あまり親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう	3.49	2.81	2.460	78	0.016
特別親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう	3.55	3.19	1.192	47.400	0.239
単なる知り合いで同年代の人と一緒にいる時の緊張感は、他の人より私の方が強いと思う	3.89	3.11	2.321	48.904	0.025
嫌いな人が話しかけてきた時、私は他の人たちより落ち着かない気がする	3.83	3.04	2.535	47.336	0.015
全く気の合わない人と雑談している私はとても緊張する	3.91	2.59	5.031	78	0.000
私はあまりよく知らない友人と雑談している時、私は他の人たちより落ち着かない気がする	3.53	2.74	2.676	47.594	0.010
とても苦手な人と偶然出会った時の緊張感は、他の人より私の方が強いと思う	3.47	2.89	2.022	78	0.047
初めて会った人と雑談している時、私は他の人たちより落ち着かない気がする	3.98	2.93	3.298	38.970	0.002
状況別対人不安尺度(合計尺度)	29.64	26.52	2.814	62.561	0.007

5-3-2. 仮説 2

続いて仮説 2 の「兄を持つ妹よりも姉を持つ妹の方が対人不安特性が高い」を検証する。仮説 2 では「兄を持つ妹」と「姉を持つ妹」にグループ分けを行い、仮説 1 同様毛利・丹野 (2001) による状況別対人不安尺度を元に作成した調査項目に関する t 検定を行なった。その結果、「特別親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう」(兄を持つ妹=3.50 次子・中間子=2.17 $t(20) = 2.316, p < 0.031$) の項目には有意差を認めることができたものの、他の 7 項目と合計尺度では優位差を認めることができなかった。したがって仮説 2 は棄却された。

図9 仮説2のt検定

質問項目	平均値		t値	自由度	有意確率
	兄を持つ妹	姉を持つ妹			
あまり親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう	3.20	2.58	0.993	19.733	0.333
特別親しくはない同年代の人(同性)に出会った時、私は不安を感じてしまう	3.50	2.17	2.316	20	0.031
単なる知り合いで同年代の人と一緒にいる時の緊張感は、他の人より私の方が強いと思う	3.10	2.50	0.968	20	0.345
嫌いな人が話しかけてきた時、私は他の人たちより落ち着かない気がする	2.70	2.67	0.051	19.984	0.96
全く気の合わない人と雑談している私はとても緊張する	2.70	2.92	-0.376	19.047	0.711
私はあまりよく知らない友人と雑談している時、私は他の人たちより落ち着かない気がする	3.30	2.67	1.081	19,997	0.293
とても苦手な人と偶然出会った時の緊張感は、他の人より私の方が強いと思う	3.00	3.08	-0.152	19.502	0.881
初めて会った人と雑談している時、私は他の人たちより落ち着かない気がする	3.10	2.92	0,266	19.996	0.793
状況別対人不安尺度(合計尺度)	24.60	21.50	0.832	19.93	0.415

5-3-3. 仮説3

最後に仮説3の「対人不安を感じる男性よりも対人恐怖を感じる女性の方が親和動機が強い」を検証する。仮説3では「対人不安特性の強い男性」と「対人不安特性の強い女性」にグループを分け、親和動機尺度を元にした元で作成した調査項目に関するt検定を行なった。親和動機尺度は「拒否不安尺度」と「親和傾向尺度」によって構成されていると先に述べたが、結果として「親和傾向尺度」では有意差が見られなかったものの、「拒否不安」の尺度で見た時に有意差を認められる結果となった。

「拒否不安尺度」でしか有意差が見られなかった原因として女性の従属意識が原因と考えることができる。先に述べた保坂(1993)では、「自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている」と述べていた。ここには女性が親和傾向というよりも拒否不安の方が強く感じていると考

えることができる。親和動機尺度でこの枷越を見ていくには範囲が広すぎたため、有意差を認めることができなかったのだと推測する。

しかしながら拒否不安尺度に関しては3項目に関して有意差が認められなかったものの、合計尺度では有意差を認めることができた。したがって、仮説3は一部支持された。

図10 仮説3のt検定

質問項目	平均値		t値	自由度	有意確率
	男性	女性			
仲間から浮いているように思われたくない	3.60	4.18	-1.99	37.24	0.053
どんな時でも相手の気持ちを損ねたくない	3.70	4.29	-2.27	32.81	0.029
できるだけ敵は作りたくない	3.70	3.14	1.32	35.60	0.196
友達と対立しないように注意している	2.95	3.64	-1.95	30.37	0.061
誰からも嫌われたくない	3.15	3.18	-0.77	44.18	0.939
みんなと違うことはしたくない	2.75	3.50	-2.27	46.00	0.028
仲間外れにされたくない	2.80	3.68	-2.48	46.00	0.017
一人であることで変わった人と思われたくない	2.65	3.61	-2.49	46.00	0.016
一人ぼっちで痛くない	2.25	3.54	-3.34	42.08	0.002
拒否不安合計尺度	27.55	32.75	-4.52	45.00	0
人と付き合うのが好きだ	3.85	3.50	-0.14	42.80	0.886
友人とは本音で話せる関係でいたい	3.10	3.54	0.91	38.36	0.367
友人には自分の考えていることを伝えたい	3.30	3.64	-1.46	37.43	0.151
人と深く知り合いたい	3.15	3.57	-0.69	33.94	0.498
友達と悲しみや喜びを共有したい	3.20	3.61	-1.06	37.02	0.297
知り合いが増えるのが楽しい	3.50	2.93	0.68	35.30	0.5
できるだけ多くの友人を作りたい	3.40	3.07	1.08	37.38	0.288
友人と非常に親密になりたい	2.85	3.39	0.23	36.95	0.987
一人であるよりも人と一緒にいたい	2.85	3.96	0.27	39.89	0.747
親和傾向	29.8	30.2	0.07	45.95	0.778

6章 まとめと考察

6-1. 本研究のまとめと考察

現在の日本人は人見知りの人が全体の6割とも言われている。自身で自分のことを人見知りだと感じている割合が6割もいるのである。学術的に「人見知り」という言葉は「対人不安特性の強い人」という大きな括りにまとめられることが多い。一人でご飯を食べる時に抵抗を感じている友人が多くいるのも事実である。

本論文では「対人不安」と「親和動機」という二つのキーワードから兄弟関係や男女別に見た時に考えられうる仮説を立て、検証を行ってきた。検証結果をまとめると以下ようになる。

仮説1 「次子、中間子よりも長子の方が対人不安特性が高い」：支持

仮説2 「兄を持つ妹よりも姉を持つ妹の方が対人不安特性が高い」：棄却

仮説3 「対人不安を感じる男性よりも対人恐怖を感じる女性の方が親和動機が強い」：一部支持

以上の結果を見て、一つずつまとめと考察を行なっていく。

仮説1では、「次子、中間子よりも長子の方が対人不安特性が高い」が支持されたことで、次子や中間子の方が長子よりも人に対して積極的であることが明らかになった。筆者自身長子はあるものの、人見知りの素養を持ち合わせていないこともありこの結果には驚きではあったものの、長子の方が次子や中間子よりも落ち着いている人が多いと感じていた経験から見た時に、自分から話しかけに行くよりも落ち着いて人の話を聞く「聞き上手」な人が多いのはこの対人不安が大きな原因にもなっているのかもしれない。

仮説2では「兄を持つ妹よりも姉を持つ妹の方が対人不安特性が高い」が棄却される結果となった。そもそのサンプル数を多く取ることができなかったことも棄却された理由の一つとして上げることできるものの、仮説1が支持されたことにより、そもそもこのサンプル自体に対人不安特性が強い人が少なく、数字が出なかったことが主な原因として考えられる。

最後に仮説3では「対人不安を感じる男性よりも対人恐怖を感じる女性の方が親和動機が強い」が支持されたことで、男性よりも女性の方が友人関係を築いて行くことに気を配っていることが明らかになった。特に面白いと感じたのが親和動機の因子の中の「拒否不安」と「親和傾向」の中でも「拒否不安」の方に有意差が認められたことである。先述した先行研究にも女子生徒たちは「自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている」とあるように、女性は集団に対して依存的であり、その中でもその集団の人と仲良くなりたい、深い話ができるようになりたい、という気持ちよりも、むしろ今所属している集団から離れたくないという気持ちがモチベーションとなって生活していることがわかった。

6-2. インプリケーション

本研究では兄弟間や男女間で対人不安と親和動機に関する関連性があるかを研究してきた。以前からチームを活性化させるためにはそのチームのベクトルの向きを揃える必要があると論じられてきた。そのベクトルを強くさせる手立てにこの研究を活用できるのではないかと考えている。以下では学術的イ

ンプリケーションと実務的インプリケーションに分けて論じていく。

本研究では、兄弟間や男女間での対人不安・親和動機の相関関係について論じてきた。これまでは兄弟間での性格の差異や男女間での従属意識の差異について論じる研究が多くあった。しかしながら、本研究で扱ってきたようなテーマで論じてきたものは今までになかった研究であり、非常に興味深い結果が出たと考えている。特に男女間での差異に関しては日常的に肌感覚として味わってきた分野だけあり、数字として結果が出たことは興味深かったと感じている。また、男女間での差異についての研究は以前にもなされてきている分野ではあったものの、兄弟間での対人不安特性に言及している研究がなかったことから興味深い研究分野であったのではないだろうか。このことを鑑みるに、「兄弟間」を様々な分野にも応用して考えていけると考えている。例えば、兄弟間での人見知り（対人不安）についての差異が認められた背景から、コミュニケーションの取り方に言及して研究を進めることができるであろうし、非言語コミュニケーションの分野に関しても何らかの形で言及できるのではないだろうか。以上を学術的インプリケーションとして提案する。

次に実務的インプリケーションを本研究の結果からマーケティングの観点で提案していく。チーム内や社内でのチームビルディングを行なっていく際に非常に有効なものだと考えられる。今までは部下に対して一様に同じようなコミュニケーションをとっていたところを相手の兄弟構成を考慮に入れるだけで今までとは違ったコミュニケーションを図ることができるのではないだろうか。自分がそのチームの上の立場である時に新しく入ってきた部下に対して最初からたくさん話しかけていくのがいいのか、それともゆっくりと距離を詰めていった方がいいのか、対人不安特性のある長子に対してはゆっくりと距離を詰めていき、対人不安特性のない次子や中間子に対してはたくさん話しかけて見る…など、一人一人に対して打つべくコミュニケーションを変えていくことで有効なチームビルディングをすることができ、仕事を進めていく上で非常に効果的であると推測できる。また、男女間で親和動機の差異が出て、特に女性は拒否不安が高いという結果が出たことから、仲間はずれにならないようなコミュニケーションをチーム全体で行なっていくことで仕事を円滑に進めることができると推測できる。

6-3. 本研究の限界

本研究では兄弟間や男女間で対人不安と親和動機に関する関連性があるかを研究してきた。ここで明らかになったのはどういった人にどういった傾向が見られるかという話であり、そういう人に対しての具体的なアプローチを示すことができなかった。より有意義なコミュニケーションを図っていく上で相手のことをよく知ることは非常に重要であり、その要素の一部をこの研究で明らかにすることはできたものの、具体的な行動にまで落とし込めなかったのは本研究の課題であり、限界でもあったと考えている。しかし、「〇〇といったときに△△という行動をとる」という具体例は星の数ほどあり、それを一般化するのにも膨大な量を考えなければならず、限界を感じた。ここから研究を進めて行くにあたって、人間のコミュニケーションパターンを一般化し、なおかつそこに兄弟間や男女間のクロスをかけてみることで、一般化されたコミュニケーションを明示することができるとともに、現在人見知りの人に対しての新しい提言ができると考えている。

しかし、ここでまた一つ課題であるのがコミュニケーションは一般化することが非常に困難であるということである。人によって話題が違えばイントネーションも違えば話し方も変わってくる。その中で画一的なコミュニケーション方法を提案することができるのであれば非常に画期的である。今後はその可能性を視野に入れながら検証を行っていきたい。

参考文献

- ・粟津恭一郎 (2016) 『The Art of Asking Good Questions』 「「良い質問」をする技術」、2016年9月号。
- ・伊東由希子 (2011) 「「ほめ」とはどのような言語行動か～コミュニケーション主体の意識に沿ったとらえ直しを目指して～」 『待遇コミュニケーション研究』 第8号、1-11。
- ・遠藤由美 (2007) 「主観性の社会心理学～内なる経験の積極的機能～」 『実験社会心理学研究』 第46号、37-89。
- ・太幡直也 (2017) 『懸念的被透視感が生じている状況における対人コミュニケーションの心理学的研究』 福村出版。
- ・大屋幸恵、内藤暁子、石森大和 (2016) 『文化とコミュニケーション』 北樹出版。
- ・落合萌子・松井豊 (2009) 「他者表情が変化する場合における解釈と感情に対人不安特性が与える影響～注意を媒介手段として～」 『筑波大学心理学研究』 第38号、35-46。
- ・小出寧 (1998) 『男と女の心理テスト』 ナカニシヤ出版
- ・近藤章久 (1964) 「日本文化の配慮的性格と神経質」 『精神医学』 第6号、13-22。
- ・近藤喬一 (1980) 「対人恐怖の時代的変遷～統計的観察～」 『臨床精神医学』 第9号、45-53。
- ・佐藤有耕 (1995) 「高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析」 『神戸大学発達科学部研究紀要』 第3巻、第1号、11-20。
- ・澁谷覚 (2017) 「知らない他者とのコミュニケーション～オフラインとオンラインにおけるインタレストグラフの役割～」 『Japan Marketing Academy』 23-36。
- ・杉浦健 (2000) 「2つの親和動機と対人的疎外感との関係」 『教育心理研究』 98-106。
- ・田中楓子 (2015) 「友人関係の形態と満足感の関連」 『人間文化 H&S』 第38号、125-132・
- ・中村陽吉 (2000) 「対面場面における心理的個人差～測定の対象についての分類を中心にして～」 ブレーン出版。
- ・平林進・藤谷貴代 (2002) 「出生順位と性別構成による性格について」 『名古屋女子大学紀要』 第48号 75-85。
- ・廣岡雅子、廣岡秀一 (2004) 「中学生のコミュニケーション能力を高めるアサーション・トレーニングの効果」 『三重大学教育学部研究紀要』 第55号、75-90。
- ・深田博巳 (1999) 「コミュニケーション心理学～心理学的コミュニケーション論への招待～」 北大路

書房。

- ・保坂一巳（1993）「中学高校のスクール・カウンセラーの在り方について～私立女子校での経験を振り返って～」『東京大学教育学部心理教育相談室紀要』第 15 号、65-76。
- ・堀井敏章（2011）「大学生における対人恐怖心性の時代的推移」『横浜国立大学教育人間科学部紀要教育科学』第 13 号、149-156。
- ・西村洋一（2005）「コミュニケーション時の状態不安及び不安生起に関連する要因の検討」『パーソナリティ研究』第 13 巻、第 2 号、183-195。
- ・毛利伊吹・丹野義彦（2001）「状況別不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」『健康心理研究』23-31。
- ・山崎秀夫（2005）「日本的知識コミュニティ（実践コミュニティ）も特徴」『ナレッジ・マネジメント研究年報』第 6 号、1-11。
- ・横山ひとみ、大坊郁夫（2012）「対面説得事態における対人コミュニケーション・チャネルに関する研究～チャネルの使用とその効果～」『社会言語学』第 15 号、73-88。
- ・仲嶺真（2015）「街中で初対面の男性から話しかけられた女性の判断と対応」『心理学研究』85 号、596-602。
- ・吉井克己（2017）「対人コミュニケーションにおける個人心理についての調査と研究～調査から見えた対人コミュニケーションにおける向性の違い～」『武蔵野短期大学研究紀要』第 31 号 17-27。
- ・渡辺敦子（2002）「対人恐怖申請の高い個人のコミュニケーションに関する研究」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第 50 集、111-121。
- ・渡辺敦子（2003）「対人不安と自己提示～さまざまな対人場面における自己提示動機付けと効力感について～」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第 51 集、187-194。
- ・和田実・田代佳央理（2015）「大学生の性、二者間の親密度が向社会行動に及ぼす影響～シャイネスと対人不安の媒介効果～」『人間学研究』第 13 号、19-31。